

絆回廊
新宿鮫X

今みたいな時代、どんな思いであろうと、強い感情をもてるのは幸せなことだと私は考えている。何となく好き、何となく嫌い、何となく生きづらい、そんな程度しか心を動かす余裕のない人々が多すぎる。

それは確かにしかたがない。何もかもが早く変化する。自分がゆっくり動けば、止まっているのと同じで、周りがどんどん追い越していつてしまう。電話やメールで次から次に新しい話が流れこみ、その意味をよく考える暇もなく返事をしたり、次の行動を決めなくてはならない。

感情よりも行動が先だと、どうしても自分の気持を確かめる余裕がなくなってしまう。だから、なぜ自分がこれをしたのか、あるいははしたくないのかを、はっきり説明できない人が増えているのだ。

その点、私は幸せだ、といえるだろう。ずっとあの人が好きで、それもすごく好きで、あの人の存在が私の生活の中心軸だった。あの人の代わりに手紙を書き、あの人が帰ってくる日に備えて、できる限りの準備をした。

1

身元引受人として恥ずかしくないよう、頑張って仕事もした。若い頃にたくさん射った注射のせいで、この何年かはすごく体調が悪かったけれど、もうすぐ、もうすぐ、と思えば耐えられた。

今から思いだしても本当に長い時間がかかっている。最初は十二年といわれ、それなら八年くらいですむのかな、と思っていた。それが二十二年もかかった。

なぜかはわかっている。まっすぐに妥協を知らないあの人を、規則だらけの監獄に押しこめようとするからだ。あの人は決して折れない。どんな理由があっても、相手や周囲に合わせて自分を殺すなんてできないのだ。

だから私は好きになった。欠点がない人ではない。でも別れた奥さんに対してもそうだったように、人を差別しないし、一度守ると決めたものにはまるで野生の獣のように体を張る。

あの人にそんな風に思われるなら、私は死んでもいい。二十六年前、初めて会ったときから私はそう思ってきた。でもそうなることは、きつと一生ない。

だがこの二十六年間で、今が一番幸福だと私は断言できる。なぜなら、あの人といっしょに暮らしているから。

触れようとすればあの人はきつと怒る。言葉にしたって嫌がるだろう。それでもかまわない。あの人とこうして同じ屋根の下で過す時間が、私にとっては何ものにも替えがたい宝物なのだ。

そして、あの人も、今の時代にあって幸せだ。なぜなら、憎しみとはいえ、強く激しい感情を抱いているからだ。

その憎しみが誰に向けられているのか、私は知っている。あの人と奥さん、子供との仲を引き裂いた男だ。その男への憎しみをかたときも薄れさせることなく、二十二年間をあの人は獄に耐えて

きた。

こうして自由になった今、あの人にはその憎しみを晴らす権利がある、と私は思う。それが結果、再びあの人の自由を奪うことになっても、あの人の命を縮める結果になっても、私はそれを応援する。悲しいとは思わない。

なぜならあの人の存在はすべて、その憎しみが支えているからだ。

これほどまでに人を憎める人を、私は知らない。だがこれほどまでに人を好きになる私だから理解できる。

明日は手紙を書く日だ。息子さんに、あの人が帰ってきたことを知らせよう。そしてできれば会わせてあげたい。遠くにいる息子さんだから、簡単には会いにこれないだろうけれど、あの人の強い憎しみの根源が息子さんへの愛にあることを知れば、きつと、必ず、父親に会いたいと願う筈だ。

2

携帯電話とインターネットの普及によって、詐欺をのぞけば最も変化した非法ビジネスが、盗品や違法ドラッグ、拳銃などの密売だ。

かつて売人たちにはそれぞれの縄張りがあり、そこさえつきとめれば監視することで取引の現場をおさえられた。同時に顧客も、その現場を知らなければ売人との接触がかなわなかった。つまり売る側にも買う側にもある種の専門性が必要だった。

それがインターネットによって売買情報を誰でも検索できるようになった。さすがに「覚せい剤」

だの「拳銃」で情報を得るのは難しいが、それにかわるネット上での隠語を入力すればたちどころに売り手の条件が入ってくる。該当する隠語は、警察の追及を逃れるために次々と変化し、覚せい剤ひとつとってみても、「ネタ」や「冷たいの」といった今や古典的な言葉から「雪」や「クリスタル」といった暗号的な表現にまで「進化」しているのが現状だ。

インターネット上で顧客と売り手の接触が完了すると、次は直接の取引だが、その現場に新宿や渋谷といった盛り場が選ばれることはほとんどなくなっている。

かつては不特定多数の人間がいきよめる盛り場が、安全な取引場所だった。しかし防犯カメラの出現がそれをかえた。たとえそこに張り込み中のデコスケがいなくとも、VTRにしっかりと現場を撮影されている、という具合だ。防犯カメラは盛り場ほど数が多く、新宿の歌舞伎町などは、写らない場所を見つけるのに苦労するほどだ。もちろんあるにはあるのだが、いつてみればそこは落とし穴のようなもので、うしろ暗い連中が集まるのを、舌なめずりして警官が待ちかまえている。

かくして非法商品の売買取引は住宅街にその舞台を移した。昔は人通りの少ない地域での取引は目立つとして敬遠されたものだが、携帯電話さえあれば長時間うろつく必要がないことから、むしろ安全と考える者が増えたのだ。確かに住宅街には、盛り場ほど防犯カメラは設置されていない。住宅街にあるカメラは、侵入者を監視するのがその目的で、路上で待ち合わせる者や、数十秒とならあわせて止まる乗用車などを撮影することはない。

鯨島の仕事はつまり、それだけ困難になった。

だがいつの時代も、古臭い人間はいる。インターネットなど信用できないと決めつけ、頑固なままで古典的な方法にこだわる変わり者だ。

露崎という売人もそうしたひとりだった。縄張りには新宿駅東口の雑踏。これ以上はないというく

らい古めかしい場所で、クスリを買いにくる客を待っている。ベテランだけあって防犯カメラに取引の現場をおさめられるような下手は決して打たず、半径五十メートル以内に警官がいればたちどころにその匂いを嗅ぎつける。

もちろん“商品”をもって歩くような間抜けではない。客と接触し安全が確認されるまでは決して品物をおいた場所まで案内しない。以前はそれがコインロッカーだったり喫茶店で待たせた仲間だったりしたものだ、今は別の場所になっているようだ。それがどこであるかはわからない。品物の隠し場所は、露崎にとっては秘中の秘だ。そこさえおさえられなければ、どれだけ警官にマークされようと逮捕を逃れられる。逆に品物の在り処を嗅ぎつけられたら一巻の終わり、露崎は泣く泣く、売れば金になるブツをあきらめる羽目になる。

もちろん品物に指紋を残すような馬鹿ではないから、押収されてもそこからたどられる心配はない。

露崎が売人として特異なものにはもうひとつ理由がある。それはネタ元が一人所ではない、という点だ。

末端の売人が暴力団の構成員であることはまずない。万一、構成員がつかまれば、捜査は組全体に及ぶ。そこでクスリを扱う組は、組とは無関係な卸し元を用意し、売人を集める。売人が日本人であることは少ないが、日本人ならばそのほとんどがクスリの常用者だ。十パケ（包）売れば一パケがただになる、というシステムにのって自分のクスリ代を浮かすために売人となる。つかまってももちろんネタ元に関して口は割らない。割れば次から自分にクスリが回ってこないからだ。映画のようにネタ元を喋ったからといって、命を狙われるということはない。たかがヤク中ひとりの生命と引き換えに刑務所に入るようなお人好しは現代のやくざには皆無だ。

とはいえ卸し元が定まっている以上、通常は売人と卸し元、さらにはその向こう側に潜む暴力団は一本の線でつながっている。

露崎が異なるのは、いくつもの卸し元とコネをもっている点だった。ベテランでなければ不可能なことだ。それによって露崎は、品不足のときであっても“商品”の安定供給と安心価格を維持できる。

大がかりな摘発が中国国内で起こると、覚せい剤は品薄になり値段がはね上がる。その波及は、覚せい剤以外の商品、たとえばMDMAや大麻などにも及ぶ。かつて暴力団は、大麻などはガキのおもちやだとして、専門に扱う組が少なかった。扱ってつかまればそれなりの処罰をくうのに、供給が不安定で、大きな儲けに結びつかないからだ。

それが栽培技術の進歩で、屋内農園による大量生産と供給が可能になり、覚せい剤の北朝鮮ルートは壊滅ともあいまって商品価値が向上した。

大規模な屋内農園を作るにはそれなりの初期投資が必要だ。その資金援助をおこなうかわりに販路を独占するというのが、暴力団の手口だ。栽培も卸し元もあくまで組とは無関係な人間でありながら、販売による利益はしっかりとつかずめとっていく。

覚せい剤と大麻の密売ルートがまったく別であった時代なら、覚せい剤の品薄が大麻の価格高騰につながることはなかった。が、根がひとつとなるとそうはいかない。覚せい剤販売利益の減少を別の商品で確保するべく、大麻の値は上がる。

露崎は、そうした市場の動向とは関係なく、一定の値で品物を提供する売人だった。それは顧客のあいだでは“良心的”との評価をうけている。

新宿署のベテラン刑事の多くが露崎の存在を知っていた。にもかかわらず検挙されないのは、そ

れが難しいからだ。めったにないことではあるが、用心深い露崎が顧客と接触するのを視認できても、品物を手渡すところまで見届けるのは不可能に近いと知っているので、そこまでの労力を割くのをためらう気持がある。

せいぜいが売買のあとと客を見つけ、職質をかけてクスリの所持を理由に現行犯逮捕するくらいだ。だがそれをしたとしても客は露崎から買ったとは決して吐かない。吐けば二度と売ってもらえなくなる。取調べでは、外国人の売人から買ったといい、顔はよく覚えていないと主張する。実際、顧客の電話番号が登録された携帯電話をもつイラン人やパキスタン人の売人は、掃いて捨てるほどいる。その連中にとって携帯電話は店の帳簿と同じで、一台数十万から百万円の値で取引される。つまり同じ外国人が何年にもわたって売人をつづけるわけではなく、本国に帰国したり他の国へ移ることで、顧客の電話番号だけが受け継がれていくのだ。

たとえ売人をつかまえても、電話のデータのバックアップさえあれば、翌日から別の売人が商売を始められる。そこに「プロ」としての技術めいたものはほとんどない。必要最低限の日本語さえ喋ることができればよい。

それに比べれば、露崎は立派な「プロ」だ。多くの刑事が、奇妙だがその仕事ぶりにはある種の敬意を払っていた。

鮫島が足を止めたのは、新宿三丁目にある家電量販店の二階だった。パソコンを主に扱っている売場で、人のいききが激しい。その中にずんぐりとした露崎の姿を見つけた。

露崎は販売員とノートタイプのパソコンをはさみ、話しこんでいる。鮫島自身、自宅用のパソコンのソフトを捜しにきたところだった。

鮫島は露崎の視界に入らない位置に移動するとあたりを見渡した。

しきてんらしい人物はいない。しきてんとは見張り役のことで、売人が商売をするときは、あたりに立たせておくのがふつうだ。だが売人より先にしきてんの面が割れると、ここで密売をやつていまずと宣伝するに等しく、露崎は使わないこともあるようだ。

かわりに男の姿がひつかかった。鮫島の左手十メートルほどの位置に立ち、陳列されたソフトを手にしながら、ちらちらと露崎のほうをうかがっている。

しきてんではない。しきてんなら決して売人を見ることはない。しきてんが警戒するのは警官や地回りだ。

男は二十代の半ばくらいで、リュックを背負い、マスクをつけている。チェックのシャツにチノパンといういでたちだ。足もとを見るとやけにびかびかの皮靴をはいていて、そこだけがそぐわない。

男が手にしたソフトの箱を棚に戻し、再び露崎を見た。

鮫島は露崎に目を向けた。露崎が販売員に何ごとかをいい、首をふった。販売員は小さく頷いて、パンフレットらしきものを背後の棚から露崎に手渡した。

露崎がふり向いた。鮫島はさりげなくかんだ。視界の隅でマスクの男が歩きたすのが見えた。階段のほうに向かっている。

鮫島はマスクの男のあとを追った。男は階段を降りかけていた。

鮫島が一階まで降りると、男は店の出入口をくぐるうとしていた。鮫島は間をおき尾行した。

そこは量販店の裏口にあたっていた。歌舞伎町方向へと人が流れる路地に面している。一日を通して通行人の多い場所だ。

露崎の姿を鮫島は捜した。どこからか見ている可能性はある。露崎の“レーダー”はかなり感度が高く、監視された瞬間に反応すると、もっぱらの評判だ。

男が靖国通りにぶつかり、向きをかえた。地下街へとつながる出入口に入っていく。鮫島は足を早め、階段の頂上に立った。

露崎が階段の中腹から上を見ていた。男の姿はない。

露崎はわずかだが当惑したような表情を浮かべていた。浅黒く、せいかん精悍な顔に大きな目が特徴だ。その目がさらに大きくみひらかれ、鮫島を見上げている。

鮫島は無言で露崎を観察した。手にしていたパンフレットが消えていた。

露崎は階段の壁に背を預け、大きく息を吐いた。

「旦那、どこから、見ていたんです？」

「何の話だ」

階段を降り、露崎に近づいた。スーツ姿だが、足もとは黒いスニーカーだ。いつでも走りだせるというわけだ。

露崎は鮫島を見つめ、何ごとかいいかけたがやめた。肩をすくめ、再び息を吐く。

「偶然だなんて思わないですよ」

「河岸かしをかえたのか。あんたの縄張りほもつと向こうだろう」

鮫島がいうと、露崎は首をふった。

「やめて下さいよ。ぜんぜん気がつかなかった。俺もなまったかな」

両手をあげた。

「どうぞ」

鮫島は露崎を見つめた。

「どうせもっちゃいないだろう」

露崎は腕をおろした。

「あんたがパソコンに興味があるとは知らなかった」

鮫島がいうと露崎は空を見上げた。

「やっぱりな」

「いつからだ？」

「最近です。あいつは何も知りません。忘れてやってくれませんか」

「あの販売員か？」

露崎は小さく頷いた。

「ムシのいい話だ」

「俺が悪いんです。客が急いでるっていうから連れていっちゃった」

「店に戻るか」

鮫島は無視してうながした。露崎は吐かないだろうが、パソコンの販売員はクスリを売場に隠している。パンフレットといっしょに渡すのが手口だ。

「ネタがあるんです」

露崎が早口になった。

「そりゃ売るほどあるだろう」

「そっちのネタじゃありません。チャカカのネタです」

「その話はあとで聞く」

「頼みます。あいつはもう仕事から外します。ガキが生まれたばかりなんです」
鮫島は向き直った。

「泣き落としか。玄人のあんたらしくもない」

「チャカが手に入らないかっていつてきた男がいるんです。そんなもん何にするって訊いたら、警官を殺すって」

鮫島は露崎の目をとらえた。

「本当の話なのか」

露崎は頷いた。

「俺に向かって、『須動会か』って最初訊いてきました。びつくりしましたよ。『はあっ？』て」

須動会は十年以上前に解散した新宿の組だった。組長は引退し、足を洗わなかった者は他の広域暴力団に吸収された。

「長六、四をくらったってことか」

長六、四とは長期刑のことだ。

「でも『須動会』ですよ。奴らが東口で売してたのは、もう十五年以上前です」

「あんたは何年だ」

「連中と入れかわりです」

「つまり十五年はやってるってことだ」

「俺も引退したいと思ってるんです、本当は。けど、客が許してくれない。お前がいなくなったら、誰から買えばいいんだって」

「誰からも買わなけりゃいい」

「そんなわけないじゃないですか。結局、安いネタつかまされて体を壊したり、ネタ切れでおかしくなったりする奴がですよ。俺がいなくなったところでクスリが消えるわけじゃありません」

「ベテランのあんたがそんな理屈をうたうとはな」

鮫島はいつて、露崎の肘をつかんだ。

「そいつを必ず捜します。きつと俺以外のところからチャカを仕入れて、ヤマを踏みます。いいんですか、お巡りが撃たれても」

逮捕を逃れるためにいい加減なネタをうたう、チンピラはいくらでもいる。だが露崎はそんな素人ではない。

「本気でいつてるのか」

「本気です。あいつはマジでした」

鮫島は手を離れた。

「どんな男だ」

「いい年です。俺より上です。六十代後半。背も高くて、大男でした。髪はまっ白で短かった」

出所したてなら髪は短い。長期服役者と考えたのはまちがっていないかもしれない、と鮫島は思った。

「最初から話してもらおうか」

露崎はあたりを見回した。

「ここで？」

移動すれば、露崎との取引を呑むことになる。一瞬躊躇したが、鮫島は頷いた。

「場所をかえよう」

3

地下街にある喫茶店で鮫島は露崎と向かいあった。二人が店の入口をくぐってすぐ、あとを追って入ってきた男がいた。鮫島はなにげなくその男を見た。三十代前半、ジーンズにコーデュロイのジャケットを着て、眼鏡をかけている。パソコンが入るようなシヨルダーバッグをさげている。

「知り合いですか」

先に露崎が訊ねた。

「いや」

「旦那のあとを尾けてみたいですよ。さつき階段のところどうしろに立っていました」

男は二人のいるテーブルから少し離れたカウンターにすわった。バッグからノートパソコンをだし、開いている。

話し声が男の耳にまで届くとは思えなかった。鮫島は露崎をうながした。

「聞こうか」

「一昨日の夕方でした。もう暗くなつてたんで六時くらいだと思います。東口に立っていたら、いきなり横から話しかけられ、とびあがりました。いつ寄ってきたのか全然わからなくて」

「あんたが、か？」

露崎は頷いた。

「俺が、です。大男のくせに妙に気配がないんです。あんなの見たことがありません。向こうは俺

のことをずっと見ていたらしくて、いきなり耳もとでいわれたんです。『チャカは手に入るのか』って」

「何と答えた？」

「『はあ』ってとぼけましたよ、もちろん。見たこともない奴だし。そうしたら『お前、須動会だろ。須動会なら貸しのある奴がいる』って」

露崎はまじまじと男を見返した。

「あんた、何の話をしてるんだ」

男の目に迷いや疑いはなかった。正面から露崎の顔をのぞきこみ、いった。

「お前みたいな奴は何人も知ってる。売れないってのなら他にいくだけだ」

「そんなもの手に入れて何に使うんだい」

「手に入るのか入らないのか」

露崎はあたりを見回した。警官だとは思わなかったが、男の態度はどこか不気味だった。男が不意に露崎の顎をつかんだ。大きな手で、それに見合った力だった。

「こつちを見ろ。何に使うか教えてやる。お巡りを殺すんだ」

露崎は男の手をふりほどいた。わざと大声でいった。危険を感じていた。

「あんたおかしいんじゃないのか。そんなもの誰がもってるかよ！」

男は無言だった。露崎の顔を記憶に焼きつけるようにのぞきこみ、くると背を向けた。

「あつという間でした。夕方の東口ですからね。すぐに見えなくなった。何か俺はぞつとして、しばらく立つっていました」

「何にぞっとしたんだ？ 顎をつかまれたことか」
鮫島は訊ねた。

「そんなのは別にたいしたことじゃありません。あそこで始めた頃は、よく組の事務所とか連れていかれて、ヤッパだのチャカだのつきつけられたもんです。いちいちびびってたら商売なんかできませんよ。本気で殺してやると威されたことありますし」

露崎は首をふり、運ばれてきたコーヒーを音をたててすすった。

「何ていうか、あの大男の印象、ですよ。冷たいっていうのともちがうな。変ないい方で、ほめてみたいんですけど、ブレないっていう感じなんです。何があるうと、やることはやるって決めているような雰囲気があつて。それが警官殺しでしょう」

「筋者じゃないのか」

「ちがうと思います。もちろんカタギでもないんですが、組関係だったらいくら何でも須動会が今はないことくらい伝わっているでしょうし」

「だが須動会に貸しがある奴がいる、といった」

「ええ。だからすつかたギでもないと思うんです」

「年齢は六十代後半、髪は短くてまっ白、他に気がついたことは？ 服装はどんなだった？」

「コートを着ていました。白っぽい、薄手のスプリングコートみたいな奴です。荷物は何ももってなかったな」

「顔は？」

露崎は顎をなでた。

「ごつごつしてました。岩を削ったみたいな感じで、彫りは深い感じで」

「言葉に訛なまりとかはなかったか」

「なかったと思いますね。ふつうでした。喋りかたはゆっくりで、聞きとりにくいとかそういうのもなかったですし」

「次に会ったらわかるか」

「もちろんです」

鮫島はコーヒーカップをとりあげた。作り話だとは思わなかったが、簡単にウラをとれるような話でもない。

十年以上前になくなった組の名を口にしたのは、おそらく長期服役を終えたばかりだからだろう。刑期が十年以上となると、殺人罪で収監されていた可能性が高い。

しゃばにでたてだとすれば、保護観察下にある筈だ。保護観察とは、仮釈放された受刑者が、保護観察所の指導監督下におかれる状態を意味し、月に一度は保護観察官か保護司と面接し、生活状況の申告を義務づけられる。これを怠れば、ただちに仮釈放はとり消され、再収監される。ただ受刑者の仮釈放等の情報は、受刑者の心情や更生を配慮し、公表が制限されている。

情報の所管は法務省だ。よほどの凶悪犯罪との関連が疑われない限り、簡単には入手できない。この場合は、大男が実際に拳銃を手に入れたという証拠が必要だろう。

「どんな警官を殺す、といった？ 警官なら誰でもいいのか、それとも特定個人を狙っているのか」

「わかりません、そいつは。でも——」

露崎は首を傾げた。

「あの感じじゃ誰でもいいっていうよりは、お礼参りですね」

警官なら誰でもよいのなら、標的は全国で約二十五万人、警視庁だけで四万四千人いる。その中のひとりを狙っているのだとすれば、警視庁警察官である可能性は高い。しかも十五年以上服役していたと仮定するなら三十代半ば以上の年齢の警察官だ。

「絶対やりますよ、あいつは」

確信があるように露崎はいった。

「見ず知らずの人間に宣言して人殺しをやる奴は少ない。まして警官を」

「あいつは別に俺に宣言したわけじゃないと思います。本気で考えていて、それ以外に目がいかないだけなんです。よけいなことをいったら自分が不利になるとか、そんなところまで考えが回らないんですよ」

鮫島は煙草に火をつけた。露崎がいうような人物であるならば、相当に、んぼつて、たどえ銃を手に入れられなくとも、早晚、犯行に及びそうだ。ナイフや包丁、なければバットや棒きれを使ってでも、標的の命を奪おうとするだろう。銃を手に入れたいと考える最大の理由は、相手も銃を所持している警官だからにちがいない。

すると制服警官なのか。

鮫島は煙を深々と吸いこんだ。私服刑事が常時拳銃を携帯していることは少ない。拳銃を携行するのは、機動捜査隊に所属する者か、抵抗が予想される被疑者の逮捕に向かう場合だ。近年は私服刑事の拳銃着装の機会が増加し、発砲に対する制限もゆるやかになってきている。これは外国人犯罪者などに、“発砲しない”日本の警官を軽視する傾向があるのと、密輸拳銃の流通増大に歯止めがかからないのが理由だ。暴力団の拳銃武装化が進み、射撃技術も海外における訓練で向上しているのが現状である。その結果、拳銃を着装しない、あるいははしても発砲をためらう警官の犯罪

抑止力に疑問を抱かれる事態が生まれつつある。それを払拭するため、着装や発砲に関して以前ほどは厳しい制限が課されなくなった。いわゆる「適正な拳銃使用」に関し、都道府県警察本部がコメントを発表するのも早い。ただし、問題の大男が十五年以上も服役していたなら、そうした警官の拳銃使用に関する環境の変化を知らない可能性もある。

その上、大男が恨みをもつ警官が十五年前どの部署に所属していようと、今も同じところには、まずいない。

警官、と露崎に告げたからには、中途退職をしていない限り、停年には達していない。しかし十五年前、巡査であったとしても現在は巡査部長、警部補、あるいはそれ以上の階級ということがある。当然、階級が上にいけばいくほど、拳銃を着装する機会は少なくなる。

大男に、標的である警官の現状に関して、どれだけの知識があるのかはわからないが、仮りに現在の地位や部署をつきとめていて、尚かつ殺害に拳銃を要すると考えたのだとすれば、警部までだろう、と鮫島は思った。それより上、警視以上の階級の警官が拳銃を着装する機会はまれだからだ。

三十代半ば以上で、階級が警部まで——そう考え、鮫島は息を吐いた。大半の警察官がその条件にあてはまる。自分もそのひとりだ。

「拳銃を欲しい理由は、警官を殺したいからという他はなかったのか」

露崎は首をふった。

「お巡りを殺す、それだけです」

一般に“お巡り”という言葉で連想されるのは制服警官が多いが、職業犯罪者は私服刑事もひっくるめて、お巡りという表現を使う。サツとかマップ、デコスケといった言葉が使われることもあるが、「お巡りがうるさい」といえば、それは単に制服警官の取締りだけでなく、刑事の捜査が及

ぶ事態を意味している場合もある。

「すつかたギに見えなかつた理由は？」

「まず、チャカを売れといったこと。それから須動会の名をだしたこと。あとはやっぱり物腰です。筋者でも、威すのが専門の奴と、本気でタマ、とりにきそうなのは、雰囲気がちがうじゃないですか。あいつは本気できそうな顔をしてた」

鮫島が黙っていると、露崎はつづけた。

「たぶんあいつはまだ新宿をうるついている筈です。ム所をでた、ならよけい他にはいかない。必ず捜せますよ」

縄張りに縛られるやくざは当然のことだが、犯罪と縁の切れない暮らしをする者ほど、行動範囲が狭いものだ。土地勘のない場所での犯行は、逮捕されたり同業者とのトラブルの確率が高く、回避する傾向にある。

刑務所を出所したばかりの大男が拳銃を入手する目的で新宿を訪れたのだとすれば、露崎の言葉には説得力がある。

「携帯の番号を教えてください。必ず連絡をしますから」

露崎は熱のこもった口調でいった。

「ガセだつたら——」

鮫島がいいかけると、露崎は首をふった。

「いつでも俺をバクつていい。俺はこういう取引をしたことはありません。今日こんなことになつちまつたのは、一生の不覚だ。吞んでくれるのなら、必ず答をだします」

「わかつた」

鮫島は答え、携帯電話の番号を教えた。露崎は深々と頭を下げた。

「恩に着ます。そいじゃ——」

コーヒートの伝票を手にしちあがろうとするのを、鮫島は止めた。

「それは俺が払う」

露崎は苦笑した。

「じゃ、ごちそうになります」

露崎がでていき、鮫島は煙草を一本吸つてから立ちあがった。

レジで支払いをしていると、ショルダーバッグの男が近づいてきた。

「少し、お話をいいですか」

鮫島は男に向きななおった。風体から正体の見当はついていた。

「記者さんか」

男は頷いた。眼鏡の奥の目がやけに大きく、落ちつきがない。名刺をさしだした。大手の週刊誌の名が印刷されている。

「個人的な取材はうけない」

名刺を見て、鮫島はいった。男は表情をかえず、答えた。

「そりゃ、鮫島さんの仕事に関して、でしょう。青木あおきさんに関してはどうです？ 青木晶しよさん」

「同じだ」

鮫島は口調をかえることなく、いった。

「失礼する」

「じゃ、好きなように書かせていただきます。よろしいんですね」

鮫島は足を止め、手にした名刺をもう一度見た。

「週刊銀河、記者、下里宏一」とある。

「取材したところで、好きなように書くのはかわらないのじゃないか」

「それはそうですね」

打ってかわって下里の目が細まり、口もとに笑いが浮かんだ。

「晶ちゃんにクスリがらみの内偵が入ってるって話、知ってます？」

鮫島は思わず、下里の顔を見直した。

「何をいつている」

「やっぱり知らないんだ。まあ、知っていても問題ですけどね、鮫島さんの立場としては。どうですか。お話をうかがえますか」

「断わる」

鮫島は告げた。

4

「珍しいじゃん、そつちから電話がかかってくるなんて」

その晩、鮫島がかけると、晶はいった。

「今、話せるか」

「平気だよ。スタジオだけど、休憩中なんだ」

「お前のことで話を訊きたいという、週刊誌の記者に会った」

「何で、今さら？」

鮫島はためらった。内偵の話が本当なら、それを告げるのは捜査情報の漏洩になる。

「わからん。思いあたる節はないか」

「別に、ないけどな……。急だけど、明日、何やってる？ スタジオの機材の関係で急にオフになっちゃったんだ」

「夜なら大丈夫だ」

会って話すのが一番だろう。内偵が入っているならば、それを確かめられるかもしれない。

晶はクスリをやらない。かつてのバンド仲間が覚せい剤をめぐるトラブルで殺されてからは、特に嫌っている。したがって内偵の話はガセか、さもなければ誤解に基づくものだろうと鮫島は思っていた。誤解の理由があるとすれば、晶の身近にいる人間だ。

バンドのメンバーか、あるいはプロダクションの関係者、個人的な友人がクスリでつかまったのだ。つかまえたのが、刑事か麻薬取締官かはわからないが、まだその事実を公表せず、捜査の輪を広げている。

人気バンド「フーズ・ハニイ」のリードヴォーカルである晶は、標的としては格好だ。有名人が違法薬物で逮捕されれば、マスコミは大きく報道する。その結果、「クスリは怖い」というアナウンス効果が見こめる。

覚せい剤や大麻、MDMAの所持等の罪でつかまる人間など、それこそ掃いて捨てるほどいるが、それが有名人でない限りはまずマスコミはとりあげない。これほど一般人と有名人で、罪と罰にひらきのある犯罪はない。罰とはこの場合、裁判所の下す刑ではなく、マスコミによるさらし者だ。晶が万一、薬物事犯の容疑で逮捕されることにでもなれば、報道が集中するのはまちがいない。

同時に、鮫島との関係も注目の対象になる。鮫島と晶が恋人であることを知る者は双方の関係者に
少くない。

その場合、鮫島は警察を退職せざるをえないだろう。たとえ晶が無実であったとしても。